

説法・法話素材帳

日々の話・季節の話題

三日口を開て、題正月四日
大津絵の筆のはじめは何仏なにとけ
芭蕉「勸進帳」

二月五日

●物故

〔幡隨意ばんずい〕 一五四二〜一六一五。浄土宗。演蓮社智誓と号し、字は白道。相模國の生まれ。鎌倉光明寺の聖伝に師事して宗乗を学び、ついで川越蓮馨寺の存貞につき、不残・存忠・及把とともに叢林の四哲と呼ばれた。慶長六年（一六〇一）に百万遍知恩寺の二十三世となるが、同年に（十三年・十五年とする説もある）江戸に新知恩寺、後の幡隨院を創建。同十七年、徳川家康の命により長崎に下つてキリシタン改宗を図り、同地に大音寺・白道寺などを開山した。晩年には和歌山に万生寺を開いて隠棲した。〔教学面では伝法相承の次第を改め、五重伝目十三箇条・戒脈七箇条・布薩八箇条および添口伝二箇条の制をまとめた。後世、これを幡隨院流伝法と呼んでいる。〕（浄土宗必携）

◆生誕

夏目漱

〔亮賢りようけん〕 一六一一〜一六八七。真言宗豊山派。護国寺開山。上野国甘楽郡の生まれ。和の長谷寺で修行を積み、得成寺・高崎護国寺などに住す。卜筮にすぐれ、將軍家光の側室桂昌院にして将来の將軍を産むと占い、実際に綱吉を出産するに至つて、桂昌院と綱吉の帰依は深まつた。したことがより綱吉は亮賢に幕府の北薬園を与えて護国寺を創建せしめた。

●文学

墓参して寿福禪寺の梅にあり
三月七日（昭和二十三年、引用者注） 草樹会、寿福寺。

高浜虚子「虚子五句集」

三月八日

●物故

〔盤珪水塚ばんけいようたく・えいたく〕 一六二二〜一六九三。臨済宗妙心寺派。播磨国浜田の生まれ。十一歳でとくち、十七歳で出家。二十歳で長尾。長子直道とて、まことに正月とをす。〔ち己卯つちのとうのひ〕 十日に、厩戸豊聡耳うまやどのとよみみ皇子（聖徳太子）を立てりごとを以て悉ごとごとくに委ゆだぬ。〔日本書紀〕 卷第二十二

三月

●文学

巖びんに手を花に御詠歌あげて居り
昭和八年四月十日 南紀に遊ぶ。橙黄子東道。那智の滝。青岸渡寺。

高浜虚子「虚子五句集」

四月十一日

●出来事

〔鴨川で僧が入水往生する〕 仁平二年（一一五二）。カトリックにおいては自殺は絶対的な罪で地獄へ墮ちる行為とされる（映画「コンスタンティン」では、主人公は自殺未遂を犯した過去があるため、命がけで悪魔退治を行ないながらも地獄に墮ちる運命だと天使に言われてしまうシーンがある）。仏教においても基本的には悪とされる。すなわち、自己に対する殺生ということである。不殺生は五戒の一つであるから、根本原則ともいえるのだが、実はこれは例外規定がいくつもある。自殺に限つていけば、病氣などの末期状態の者が自発的に断食などを行なうことや、身を捨てて仏などを供養すること（捨身四門）

十三歳で懐疑（えしよ）について出家。ついで義介・寂円に師事した。さらに上京して臨済禅を学び、加賀大乗寺の徹通の法を嗣いだ。正和二年（一一三二）能登に永光寺を創建、ついで総持寺を開山した。曹洞宗が全国的な規模の教団に発展する基礎を作つたのは瑩山の功績だとされる。著書に「伝光録」「坐禅用心記」などがある。

●季語

〔印融いんにゆう〕 一四三五〜一五一九。高野山無量光院の学僧。晩年は関東の布教に努めた。文箱をつけた牛に乗つて外出し、一時も書物を放さなかつたという逸話がある。

●季語

〔中秋〕 陰曆八月十五日のこと。秋（陰曆七月・八月・九月）の中間日であることからこう呼ばれる。〔仲秋〕とも書く。陰曆十五日は満月であるので、月見の日ともされた。ただし、高浜虚子は「仲秋は三秋の中の月、陰曆八月のことをついたものであるけれども、陰曆を多く用ゐるくなつた今日では、初秋が秋の初頃に用ゐられるやうに、仲秋は秋の中頃の季節と解して、であらう」（『新感時記増訂版』）と述べている。

●季語

仲秋や母
十月
高浜虚子「虚子五句集」

二ヶ寺の境はこ、や秋の山
十月十日（昭和二十三年、引用者注） 大輪会。英勝寺。

十月十一日

●物故

〔種田山頭火〕 一八八二〜一九四〇。俳人。山口県防府市に生まれる。十一歳の時、母を自殺で失う。早稲田大学文学部に入学するが神経衰弱のため退学。三十歳頃より創作を始めるが実家の破産もあつて職や住まいを転々と、泥酔や自殺未遂などをしばしば行なう。大正十三年（一九二四）曹洞宗の報恩寺望月義庵を師として出家。熊本県鹿本郡の味観音堂の堂守となるが続かず、行乞流転の旅に出る。その後も庵住と流浪を繰り返し、昭和十五年十月十一日、泥酔の果てに心臓麻痺で死去。代表作に「草木塔」などがある。

●出来事

〔大徳寺で織田〕

〔天桂伝尊〕 一六四八〜一七三五。曹洞宗。天桂は字。紀伊國の生まれ。和歌山の窓養寺で伝弓ついで出家。諸國を巡つて諸師について修行を積んだ後、延宝五年（一六七七）駿河静居寺の五峯海首に師事、その法を嗣ぐ。元禄二年（一六八九）彦根の大雲寺に住し、以後、藏覺庵・丈六寺を転住、宝永二年（一七〇五）に藏覺庵に戻つた。著書に「正法眼藏弁註」「海水一滴」がある。「天桂は、当時山道白が一師印証・面授嗣法をもつて宗統を復古せしめんとしたのに対して、これが形式主義に墮しやすいものであるとの見地から熱烈に反対したが、受け容れられず、その脈下の人も含めて「天桂地獄」とも評されて、江戸時代末期に至るまで顧みられることがなかつた」（『禅学大辞典』）

十一月十一日

●物故

〔寛性かくしょう〕 一一二九〜一一六九。真言宗。鳥羽天皇の第五皇子。保延元年（一一三五）仁和寺北院において覚法法親王を戒師として出家。同三年、覚法法親王より伝法灌頂を受ける。仁和寺・円宗寺・円堂院・観音院・法勝寺の検校を勤め、仁平三年（一一五三）仁和寺第五世門跡となる。仁安二年（一一六七）には日本総法務となり、日本の僧すべてを統括する立場になつた。

●出来事

〔運慶〕 ？〜一二三三。仏師。同じく仏師の康慶の子、湛慶の父。奈良仏師の系統の家柄に生まれる十二月